

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

家事労働のゆくえ：近代家族とグローバル化 (私のスケッチ・ブック (21))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005904

家事労働のゆくえ —近代家族とグローバル化—

国立民族学博物館 助教授

森 明 子

■学生宿舎

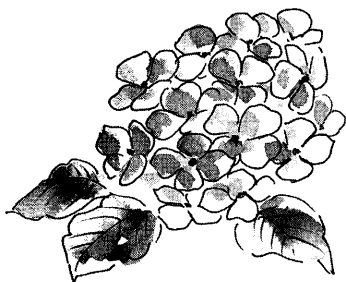
はじめて、ウィーンで生活したのは18年前で、大学院生のときだった。私に与えられた宿舎は、100室以上を有するホテルのような施設の一室だった。近代的な設備を備えたこの建物に、入居を希望する人は多いということだったが、古都の大学生活を想像していた私は、モダンな宿舎にいささか失望した。

この建物は、毎年、夏季2ヶ月、ほんとうにホテルになった。学生の夏季休暇中は、観光客が押し寄せるヴァカンス・シーズンである。この時期、すべての入居者は私物を部屋から一掃して、部屋をあけわたした。ちなみに、その私物の倉庫とされたのが共用キッチンで、夏季のあいだじゅう施錠された。ホテルとしては中の上程度、1泊の宿泊費は、当然のことながら、学生宿舎としての家賃を日割りにしたものより、はるかに高かった。収入は、建物の運営費にあてられた。ホテルとしても利用可能な集会室、バー、サウナ、卓球場、ランドリーなどを備えた宿舎だった。

■宿舎で働く人々

建物の維持管理は、ゆきとどいていた。建物全体を学生が運営していて、その組織のもとに何人もの人間が雇用されていた。私が知る限りで、管理事務を統括する中年男性がひとり、掃除担当の女性20人程度、営繕やガーデン全般にあたる用務担当の男性ひとりがいた。掃除担当はいずれも地中海地方出身の女性で、トルコ、ギリシャ、ユーゴスラビア、アルバニアなどから来ていた。そのうちのひとりが、用務担当の男性と夫婦で、ふたりともアルバニア出身だった。これらの人々は、夏季のホテルでもひきつづき働いていた。

アルバニア人の妻と、ユーゴスラビア出身の女性が2人1組で、私の住んでい



たフロアの掃除を担当していた。隣室のギリシャ人学生を含めて、私はふたりの掃除婦や用務担当の男性と親しく話をするようになった。

アルバニア人夫婦は、ウィーンで子供を育てていたが、アルバニアにも子どもを残しているということで、その子を早く迎えたい、といっていた。

ユーゴスラビアの女性も結婚していて、同郷の夫は、ウィーンの別の職場で働いていた。彼女はホテルの仕事の合間に、家政婦としても働いているということで、バイタリティにあふれ、将来に向けてしっかり蓄財しているようだった。

当時の私はことばも未熟であり、知識も不足していた。彼らは、さまざまなことを私に教えてくれた。

■掃除を他人にしてもらうこと

他人に自分の生活空間を掃除してもらうということは、子供のころならともかく、大人になってからは、あまりない。ウィーンではそれが日常生活になったわけで、助かるというよりは、落ち着いたない気持ちのほうが強かった。ほかの学生はどうなのだろう、と試してみたが、オーストリア人学生は、掃除や雑務をする外国人とあまり口を利くことがないようだった。ヨーロッパというのはそういう文化なのかもしれない、と当時の私は考えた。

当時、私が奇異に感じたものが何であったのか。その理由を、今になって整理してみると、以下のことがあげられる。

- 1) 私の私的空間を、他人が掃除する。
- 2) その他人は、下層に属すらしい。



3) その他人は年長で経験豊富である。

4) その他人と私は親しい関係にある。

私の空間を親しい人が掃除する、というのは、家族間の行動にあたる。ところが、それが他人であること、さらには、その人が、オーストリアや宿舍のヒエラルキー（社会階層）において、下位に属しているという状況が、私を戸惑わせた。

今の私は、このようなねじれた社会関係が、現代の多くの都市で起こっていて、現代世界に特有の状況を投影している、と理解できる。以下では、西欧の家事労働の展開過程に注目することから、このねじれについて考えていきたい。

■家事とは

部屋の掃除は、ほんらい家事のひとつであるが、それが現代では、しばしば外部業者にゆだねられる。オフィスの清掃はもとより、家庭でも、家政婦やホームヘルパーの助けが重要な場面がいくつもある。お年寄りの食事の宅配制度も、日常生活に組み込まれた外食も、料理という家事の外注といえる。

家事の内容は、地域によって多様でありうるし、時代によっても変化してきた。現代社会で起きている状況は、「家事労働の商品化」と呼ぶことができる。見方

によって、家庭崩壊とか、現代人の孤立化といわれる事象であるが、それは、たとえばマクドナルドの世界的な拡大と根をひとつにした現象なのである。どこに視点をすえて考えるかによって、家事労働の範囲は大きくも小さくもなる。

■近代以前の家族

家事労働がどこで、誰によって行われているか、ということから考えてみよう。家事という語は、家庭生活を営むためのさまざまな用事という意味から成っている。その場合、家庭がどのような活動を行うのか、どのような人的構成であるのか、によって、家事にもさまざまなバリエーションが起こる。

近代以前の家族は「家」であり、それは生産活動を行う労働組織だった。この考え方は古くアリストテレスにまでさかのぼる。18世紀になってようやく、家族が「家」から独立していく。「近代市民家族」の登場であり、思想的には、カントからルソー、ヘーゲルへと展開する潮流がここにある。

18世紀までの「家」は、どのような生産機能を備え、その家事労働をどのような人が遂行していたのだろうか。例として詩人ゲーテの両親の家庭をあげよう。

妻が日常的に店で購入するものは、酢、油、茶、コーヒー、砂糖、香料等に限られていた。肉、卵、バター、ワイン、ジャム、穀物や衣料の自家調達、自家製造が行われていた。そのために常時、料理女中1、家事女中2、召使1合計4人の奉公人が使われた。さらに、そのほかにも洗濯婦、針子、肉屋、鍛冶屋等のさま

ざまな手工業者が恒常的な関係をもっていった。

家事労働の担い手として家事奉公人の存在があった。

■近代市民家族

18世紀、工業の発展によって、家はそれまでもっていた生産機能を失う。商品経済が発達し、物資は市場で購入されるようになっていった。このような状況の中から、近代市民家族モデルが形成された。家庭は市場と切り離されて、温かく、清潔で、教養のある空間として位置づけられるようになる。そこでは夫が生産労働を担い、妻は家庭を守るとされた。

この近代市民家族のモデルは、なお家事奉公人を組み込んでいた。中産階級の女性が、家庭を守りながらも高潔な女性でありつづけるために、実質的な労働を担当する家事奉公人が必要だったのである。19世紀から20世紀初頭にかけて、家事奉公人の数は増大し続け、ピークに達する。

1920年代、女性労働者の職場は、家庭から工場へと展開し、家事奉公人は姿を消す。同時に、工業化の進展は家庭の内部におよび、家庭電化製品が家事労働を代行するようになっていった。このころ



から、上層市民としての中産階級家族モデルは形骸化していく。また、アメリカ南部や西部では、ヨーロッパ系移民にかわって黒人やメキシコ系、アジア系などのマイノリティの女性が、家事奉公人^{ドメスティックス}になっていった。

■サービスの商品化

第二次世界大戦後、物を生産して商品化する工業化の進展は、もはや頭打ちというところまで進展する。そこで次に商品化のターゲットとされたのが、家庭内サービスの商品化である。とくに20世紀末になると、それは人や物、金融のグローバルな流動化と連動して、さまざまな国、人、制度を巻き込んで進行した。現在、我々が目の当たりにしている状況がこれである。

例として、清掃業（掃除）、レストラン（料理）、ヘルスケア（看病）などの諸業種をあげることができよう。これらの業種は、かつて家庭内で調達していたサービスを、商品として売っているのである。それは資本主義が家庭内に侵入していく姿を示している。

■再生産労働という考え方

ここで商品化されているサービスをどうとらえたらいいだろう。かつてこれらのサービスは、家庭内で市場価値のない労働と考えられていた。だが、それは決して価値の低いものではなく、私たちの生活にとって必要不可欠の、重要な意味をもったサービスである。

これらのサービスは、じつは社会的再生産に関わっている。社会的再生産とは、

身体的・文化的・社会的に、人をクリエイト（創造）、リクリエイト（再創造）することを意味する。身体を使う仕事も、心的、感情的な仕事も、そこには含まれている。

商品化されたサービスの実際の担い手として、ここに組み込まれているのが、女性であり、その多くが社会でマイナーな存在として位置づけられていることに注意を喚起したい。私たちが再生産労働の重要性を見失ってしまえば、その先には、無責任な差別意識が口をあけて待っている。再生産労働は、清潔や健康、教育にも深く関わっていて、私たちの世界の次世代を育む労働である。私たちは、そのゆくえをしっかりと見つめてゆきたい。

□参考文献

- 1) Glenn, Evelyn Nakano “From Servitude to Service Work: Historical Continuities in the Racial Division of Paid Reproductive Labor”, *Signs : Journal of Women in Culture and Society* 1992, vol. 18, No. 1
- 2) Parreñas, R. S. *Servants of Globalization : Women, Migration, and Domestic Work*, Stanford, California: Stanford University Press, 2001.
- 3) ギーディオソ、S『機械化の文化史』（榮久庵 祥二訳）鹿島出版会 1977 [1948]
- 4) 若尾祐司『ドイツ奉公人の社会史』ミネルヴァ書房 1986